

令和7年度 学校評価

【教育の基本方針】(第2次尼崎市教育振興基本計画)

- 1 個の尊厳や人権の尊重
- 2 未来志向の教育
- 3 家庭・地域社会との連携

[各校の重点取組について]

- ・常に当事者意識を持ち、主体的に活動し、学ぶ生徒の育成
- ・不登校傾向にある生徒への支援の充実

学校評価の観点

1 学ぶ力と健やかな体の育成		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
(1) 基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得及び、思考力、判断力、表現力を育むとともに、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実による確かな学力を育成する。 (2) 多様な視点や価値観で物事を見つめる実体験を大切に、課題解決能力を高める学習を充実を図る。 (3) 運動に親しむ習慣づくりを促進し、運動能力向上に努めるとともに、様々な健康課題を踏まえた健康教育を推進する。 (4) 給食の活用等による発達段階に応じた食育を推進するとともに、家庭や地域への理解啓発を図る。		2.8	2.5
取組	成果	課題と改善策	
<ul style="list-style-type: none"> ・シラバスを作成、配布することにより学習の見通しを持たせる。 ・『単元テスト』を実施し、計画的かつ主体的な学習を促す。 ・一斉授業を見直し、『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実を図ることができるような学習環境、学習スタイルを整える。 ・放課後や夏季休業中のチャレンジスクールを実施する。 ・生徒会執行部の活動を軸として学校行事の企画・運営への生徒の参画の機会を設定する。 ・栄養教諭による給食集会、給食時の食育を実施する 	<ul style="list-style-type: none"> ・シラバスの年間学習計画を参考に、達成目標を意識して学習に取り組むことができた。 ・『単元テスト』の予定を事前に知らせることで、テストに向け、生徒自身に計画的に学習することを意識づけることができた。 ・一部教科での自由進度学習の導入、少人数授業での個に応じた学習、グループでの意見交流、プレゼンテーション資料の作成等での協働的、主体的な学びを促す授業等、内容に応じた工夫を行った。 ・執行部以外の生徒も各行事で実行委員として主体的に取り組む機会を設けた。 ・食育集会、月1回の給食中の食育を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間の内容を網羅したシラバスの活用状況に課題がある。内容の精選、提示時期の工夫など、改善を行う。 ・全教科で『単元テスト』を行うことで、テストの回数が非常に多くなり、学習サイクルが回っていない現状がある。回数の精選とともに、基礎学力の定着に向けたテストの活用について再検討する。 ・自由進度学習の取り組みをここ数年行ってきたが、主体的な学びに繋がっていない現状がある。学習に対する基本的な姿勢、学習習慣作りを改めて取り組むとともに、基礎基本の定着、課題解決に取り組む探究的な学習等、更なる授業改善に取り組む。 	
2 多様性と包摂性のある教育の推進		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
(1) 支援を必要とする子ども一人ひとりへの多様な教育ニーズに対応するとともに、学校外のグラデーションある学びの場や他機関等との連携を推進する。 (2) インクルーシブ教育の推進と合理的配慮の提供に向けた体制の整備による切れ目のない支援の充実を図る。 (3) 共生社会の実現に向け、違いを認め合い、多様な文化的背景をもつ人々と豊かに共生する心、共に生きようとする意欲や態度を育む。		2.8	2.5
取組	成果	課題と改善策	
<ul style="list-style-type: none"> ・週5日サポートルーム(学習室、プレイスクール)を開き、不登校傾向、集団に適応が難しい生徒の対応を行う。 ・日本語以外の言語を母語とする外国にルーツを持つ生徒の支援の充実を図る。 ・特別支援教育委員会を定期的に実施し、特別な教育的支援が必要な生徒の実態や手立てについて協議し、支援の充実を図る。 ・誰もが楽しむことができる行事の企画運営を通して、相手を尊重する態度の育成を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習支援員、自立支援員等の活用により、週5日、サポートルームを開くことができ、集団適応が難しい生徒の居場所を確保することができた。 ・多文化共生支援員の活用により、外国にルーツを持つ生徒の支援、日本語指導を行うことができた。 ・特別支援教育委員会を軸として、全職員が共通理解の上で支援が必要な生徒に支援する体制ができた。 ・行事の企画運営において、苦手な生徒も得意な生徒も参加できる行事のあり方について生徒が考えることにより、多くの生徒に周りの人を思いやり、尊重する姿勢が身についてきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・サポートルームでの学習保障として授業のオンライン配信、自学自習の見守りを行っているが、基礎学力の定着に向けた学習支援が課題である。また、サポートルーム内でコミュニケーション、人間関係づくりの支援についても学習支援のあり方と共に検討し、より個に適した支援につなげる。 ・インクルーシブ教育の体制整備に向け、ユニバーサルデザインの視点を入れた教育活動について研修を実施し、教員の専門性を高める。 ・外国にルーツを持つ生徒への支援については支援員の配置時数が少なく、教員の支援力によるところが大きい。ICTの活用とともに、支援員や外部の日本語支援教室と連携し、必要な時に必要な支援を行うことができるよう検討する。 	

3 豊かな心の育成といじめ防止の取組		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校長)
(1) 人権に関する知的理解と人権感覚の涵養を基盤に、自他の人権を守り、人権課題を解決しようとする実践的行動力を育成する。 (2) 命を大切にすることや思いやりの心、規範意識等の醸成に向け「道徳教育」や「心の教育」やその充実を図るとともに、様々な体験活動を通して豊かな人間性と社会性を培う。 (3) 一人ひとりの違いを認め合う仲間づくりを推進し、道徳科や特別活動、体験学習等を通じていじめの未然防止に努めるとともに、早期発見、早期対応に取り組む。 (4) 尼崎市の歴史や伝統・文化への理解を深めるとともに地域への愛着等、児童生徒の感性を高め、豊かな情操を養う。		2.9	2.5
取組	成果	課題と改善策	
<ul style="list-style-type: none"> 教育活動全般において、人権意識を高め、他者を尊重し、自他の命を大切にすることを育成する。 SNSの使い方の学習、脱いじめ傍観者授業を実施するとともに、定期的ないじめアンケート、教育相談を実施する。 生徒の自己肯定感を高め、多様性の理解を促進するような講演会を行う。 行事の際に、多様な生徒が取り組める内容を吟味し、みんなが主役になれる行事を生徒主体で創る。 地域へ目を向けることで地域の課題を見つけ、課題解決につなげる活動を取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 毎月の校長講話で人権にかかわる内容、仲間づくり、協力に関する内容を取り扱ったり、学級経営において自他を大切にすること、行事では多様な生徒全員が活躍できる行事づくりを生徒主体で行うことで、多様性への理解が深まり、自他を大切にすることを意識が高めることができた。 SNSとの付き合い方に関する学習の機会、脱いじめ傍観者授業等の取り組みを通して規範意識を醸成することができた。 全校生による地域清掃活動、2年生のトライやる・ウィークでの体験活動、3年生の尼崎市の課題の学習等を通して、地域に目を向け、自分の住む地域の課題を見つけることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> SNSが日常的に生徒の間で活用されていること、生成AIの普及による課題が大きい。実生活での活用における規範意識醸成のために、年間を通して継続的な指導を続けていく必要がある。 リストカットやオーバードーズ等、命にかかわる事案が徐々に増えつつある。こころの教育事業を活用し、新たな課題に対応できる外部講師による講演等、学習の機会を検討し、実施していく。 地域への愛着心を育て、主体的に地域にかかわる生徒の育成のため、学校運営協議会と連携した地域での体験活動、主体的な課題解決に向けた活動を学校教育活動に取り入れ、積極的に地域の課題について考える生徒の育成を図る。 	

4 教育環境の整備と教員の育成・勤務環境の整備		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校長)
(1) ICTを活用した更なる多様な学びを実現を目指して、ICTを活用した学習のデジタル化を積極的かつ効果的に推進し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る。 (2) 個別最適な学びと協働的な学びを一体的に推進するとともに、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた指導力の向上を図る。 (3) 社会的な良識と人権感覚、高いコンプライアンス意識を持ち、子どもや保護者、地域社会から信頼される教員の育成を図る。 (4) 教員の働き方改革を推進するとともに、風通しの良い職場環境づくりを進め、働きがいのある学校園づくりを進める。		3	3
取組	成果	課題と改善策	
<ul style="list-style-type: none"> 一斉授業を見直し、学習内容に応じて、一人一台端末を活用した個別の学びと小集団での対話的な学びの工夫を行う。 コンプライアンス意識を高めるために月に一度、時期に応じた非違行為防止研修を行う。 校内で業務改善プロジェクト会議を実施し、職員会議日の6校時カットなどの授業時数の見直しや校務PCとGoogleドライブのフォルダ整理、作成資料等の保存の徹底により、業務時間の削減、効率化を行う。 生徒支援、保護者対応などあらゆる業務を行うにあたり、チームで情報共有し、取り組むことを徹底する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習のデジタル化については、ロイロノート、プレゼンテーションソフト等ICTを日々の授業で積極的に活用し、個々の特性、能力に応じた主体的に学びのための授業改善に取り組んだ。 職員会議ごとの非違行為研修、管理職通信や時機をとらえた声掛けや指導を行い、人権感覚、コンプライアンス意識を高めることができた。 授業時数の見直し、ICTの積極的な活用による業務の効率化により、全体的に教員の退勤時間が早くなった。 担任ひとりが抱え込むことなく、すべての教員の情報共有により、チームとして学校教育活動、生徒、保護者支援に関わることもできた。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業におけるICTの活用に関しては教職員間の個人差が大きい。他の教職員の授業参観を通してICTのより効果的な活用について教職員相互が研究を深め、更なる授業改善を図る。 生徒への関わり方、言葉かけの仕方についてややもすると不適切な行為に及ぶ危険がある言動が見られることがあった。今後も生徒の安心安全な学校生活のために職員室の風通しを良くし、定期的な非違行為研修、機会をとらえての管理職からの指導、教員間での注意喚起を徹底していく。 働き方改革をさらに進めるためには一人ひとりの意識改革が課題である。業務の効率化、平準化を図るとともに、部活動の地域展開を視野に入れ、個々の意識改革にも力を入れていく。 	

5 家庭地域社会一体となった教育の充実		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
		(1) コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一体的推進し、「地域とともにある学校づくり」の実現に向けて取り組む。 (2) 防災教育の取組を促進し、危機管理能力の向上を図る。 (3) 安全教育の取組を促進し、登下校及び学校園内の安全確保を図る。	3
取組	成果	課題と改善策	
<ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会の場を活用し、学校の現状と課題についての報告、協議とともに、地域住民や関係者の意見を聴取し、地域とともに学校運営に取り組む。 地域、保護者と育てたい子ども像の共有を図る。 様々なパターンの防災訓練を実施し、生徒も職員も自ら考え、行動できる災害への対応力を身につける。 登下校、朝礼時の安全指導を徹底するとともに、教職員に対しても学校の安全を守るための実践的な研修を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会の場で学校の課題、取り組んでみたいと考えることをありのままに提示し、意見を聴取することで、地域から見た学校の課題に気づき、学校側として改善策を検討できた。 今年度は本校が1・17地域防災訓練の地区会場となり、避難所の設営、応急処置を地域の方とともに経験することができ、地域と学校がつながるきっかけとなった。 授業時間以外の時間帯での避難訓練を実施し、突発的な災害において、生徒が自分で考え行動する経験ができた。 校外学習時、普段の登下校時に安全指導を徹底し、生徒に対して意識づけができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 本校は学校と地域の関係性が希薄である。これまで以上に学校運営協議会の委員、保護者、地域住民に学校を開き、意見を聴取する機会をさらに増やすとともに、学校教育活動に地域の方々が関わり、生徒との交流ができる場、地域での活動の機会をできるだけ多く設けるよう検討、実施する。 学校運営協議会の委員、地域住民と連携し、地域とともに防災教育の取り組みを進める。 保護者、地域住民と登下校時の危険箇所、生徒の交通マナーの実態について共有し、地域、家庭と連携した、交通安全指導を行う。 	

教育目標(自律・尊重・創造)		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
		(1) 教育目標の達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 教育目標の具現化と指導の充実	3.1
取組	成果	課題と改善策	
<ul style="list-style-type: none"> 自ら考え、判断し、行動する生徒の育成のために、生徒会活動を中心として生徒自身が当事者意識を持って取り組むことができるような活動を多く取り入れる。 生徒会執行部を中心に社会力育成事業も活用し、主権者教育を充実させる。 多様性に関する寛容さを身につけ、自他の命を大切にできるような生徒を育成するため、体験的な活動や外部講師を招いた講演会を行う。 『生徒指導』から『生徒支援』へシフトし、共感的理解に基づき、自己肯定感を高めるような対応ができる教職員を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校生活に関する学級討議の内容を生徒会執行部で検討し、さらに教員と生徒会執行部で構成される検討委員会で対話をしながらルールメイキングをしていくことで、生徒が当事者意識を持つことができた。 主権者教育講演会を通じて、選挙や民主主義について考える機会を持ち、実際の生徒会選挙で主体的に選挙に関わる生徒が増えた。 ありのままの自分を認めることを進める内容の講演会の実施、自己選択、自己決定、対話の場を多く持ち、教員が生徒を支援する関わり方の工夫をすることにより、生徒の自己肯定感が高まった。(生徒アンケートで該当の項目の肯定的回答が8割を超えている) 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の自律を進めるためには、家庭や地域でも同じ方向性で生徒に関わっていくことが必要である。育てたい生徒像を共有し、ともに子どもも育ちを支援する関係性を築きたい。 生徒とともに多様な生徒一人ひとりが参加できる行事を企画運営することを今後も続けることで、さらに相互尊重の心、創造性を育成する。 これまで行ってきた子どもを主語とする教育環境をさらに整備し、自己肯定感を高め、主体的に学び、活動する生徒の育成に取り組む。 	

研究テーマ: 日新スタイルの定着		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
		(1) 研究テーマの達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 研究テーマの具現化と指導の充実	3
取組	成果	課題と改善策	
<ul style="list-style-type: none"> シラバスを配布し、単元テストを活用することにより、主体的かつ計画的に学習に取り組む生徒を育成する。 主体的、対話的で深い学びの実践のための学習スタイルの研究。 学校に足が向かない生徒に対してグラデーションのある支援を行う。(自宅学習支援、サポートルームでの支援等) 	<ul style="list-style-type: none"> シラバスを作成、配布することで教員自身が年間を通した授業の見直しを持つとともに、生徒にとっては評価の観点と評価方法について理解し、計画的に学習を進める手がかかりとなった。 単元テストを実施することにより、生徒が見直しを持って学習に取り組み、テスト後に振り返りを行うことで基礎的な知識の習得が促進された。今年度は自宅での単元テストの受験を可能とし、一部の生徒、教科ではあるが、学習の幅を広げることができた。 サポートルームでの支援日数を増やすことにより、サポートルームが集団生活が苦手である等の理由で学校に足が向かない生徒の居場所となり、不登校傾向にある生徒の出席日数が増えた。また、グラデーションのある不登校支援の一つの手立てとして、一部の生徒ではあるが、学級復帰へのステップとなった。 	<ul style="list-style-type: none"> シラバスの内容の精選とともに、活用を進めるために、各学年の初めにシラバスの意義、活用についてオリエンテーションを行う。 教科の特性も鑑みながら、中間テストの実施も含め、テストの精選を行い、単元テスト実施教科については主体的な学びのサイクル作りへ向けた指導過程・評価の在り方について再検討する。 学校に足が向かない生徒、サポートルームで支援を受けている生徒の個々の状況に応じた学習保障、テスト受験、評価について、さらに検討し、目標を明確にして支援を行う。 サポートルームの整備はできたが、欠席が30日を超える生徒が増え続けている。家庭環境、本人の特性等、背景を理解しつつ、生徒、保護者に寄り添い、必要に応じて関係機関との連携を強化し、将来の自立に向けたより一層の支援を進める。 	

